

孫に語る歴史

第9章 近代後期

谷川 修

第9章 近代後期

9.1 近代の歩み、帝国主義、世界大戦

A. 日本と東アジアの近代

近代日本の形成

おじいさんの同姓の親族の家は、幕末に三つになったようだ。集落での分家も明治初期までに増えたらしい。所帯を別にすることができるようになったのだろう。人口統計上も、幕末期から日本の人口は増え始めたらしい。捕鯨組の事業者がとなりの村で海を埋めたと新しく田をつくったという話も聞く。経済状況や人々の活動に何かしら活力が生まれていた、と考えられる。そういう社会状況の中で新しい政治体制ができて、日本は近代化の道を進むことになった。

新政府は急進派のクー・デターでできた。流動的な政治状況の中で、天皇の權威を旗印に、三条実美や岩倉具視などの公家を押し立て、大久保・西郷・木戸など鹿児島藩と萩藩のリーダーたちが政治的な決定をするというやり方で進んだ。その基盤は弱いから、佐賀藩や高知藩の推薦する大隈重信や板垣退助なども加えた。それらの有力諸藩の勢力とくに軍事力をうしろ盾にして、下級武士出身の若い政治家たちが、ほかの意見を封じこめて新しい政策を実行する。時代の流れが急で、すばやく政治的な決定を下さなければいけない事情もあって、すぐに

上層武士たちが政治に口をさしはさむ余地はなくなった。機会を得て政府の要職についた若い政治家たちの個人的な力量とグループの形成で、政治が動いた。しだいに有能で実務的な人材が集められたけれど、権力の中心には主に四つの藩の出身者たちがいた。それで、彼らの出身地の国名をとって、薩長土肥の藩閥政府と批判された。

西洋のように市民が政権を取ったのではないが、下級武士たちを中心とする新政府は、古い体制を惜しむことなく変更する。1869年、藩主に統治させたままだが、各藩の版籍(土地と人民)を朝廷に返還させた。本格的な廃藩置県、つまり藩を廃止して中央政府の統治する県に変えたのは1871年のことだ。その年の暮れ、岩倉を大使、大久保・木戸・伊藤などを副使とする使節団が、合州国とヨーロッパへ派遣された。太平洋を渡り、鉄道でワシントンに向かい、大西洋を越えてヨーロッパの12か国をめぐる、スエズ運河を通して帰国した。1年10か月におよぶ地球一周の大見聞旅行だった。久米邦武という人が報告書『米欧回覧実記』を書いている。中江兆民などの留学生がついて行き、各国に残った。女子留学生も選ばれている。のちに、彼らは日本の近代化のために働く。

つぎつぎに改革が実行された。戸籍制度や学校制度の改革もその一つだ。幕末に来た西洋人の感想から、大半の人が文字を読めたと言われているけれど、資料によれば誇張があるようだ。全国に公的な学校ができたことは、教育水準を高めるのに大いに寄与したと言える。政府は、

近代的な軍制をととのえ徴兵令も施行した。地租を改正して、年貢をお金で徴収するようになった。

日本が西洋列強に侵略されそうな情勢のとき、中国・朝鮮も同じ状況にあったが、人々は隣国との関係を自己中心的にしか考えることができない。朝鮮を従えて西洋に対抗するという意見が多く、吉田松陰さえその意見だった。協力するという考えの人は勝海舟など少数だった。留守政府で征韓論が強くなり、西郷を派遣することを決定した。そこへ、大久保・木戸たちが帰ってきた。帰国組は、世界を見聞して日本の現状が分かったから、戦争になるだろう西郷の派遣に反対する。1873年政変が起きた。少年の頃からの友だちだった西郷と大久保が離反する。西郷・大隈・板垣たちは政府を去る。開明的な木戸よりも意志の強い大久保が中心の政権ができた。月日とともに政府の体制がととのう。

封建制の廃止は、武士層の不満をつのらせないように段階的におこなわれた。公卿と藩主を華族に、武士を士族に、それ以下を平民に分けて、身分制度を残した。でも最終的に、給料を発行した公債の利子の形に変更する。華族には十分あったが、士族の手にするお金は少なく不満はくすぶった。しかも、中央と地方の役職の多くは人のつながりで選ばれたから、それにもれた者たちは新しい政権に不平をい込む。1874年、政権から去った前参議江藤新平たちが佐賀で反乱を起こした。1876年、萩でも前参議前原一誠たちが蜂起し、ほかの藩でも反乱が発生した。1877年には、最も強い鹿児島県の兵団が西郷をかつ

いで反乱を起こし、熊本城まで攻めた。しかし、政府軍はそれを平定して、新政府の軍事的な体制ができたことを示す。西郷が果てる前に木戸が病気で死に、翌年、馬車で出勤途上の大久保が士族たちに斬られた。

じつは明治維新のとき、榎本武揚という幕府海軍の指揮官が数隻の軍艦をひきいて函館に逃げ、西洋式の要塞「五稜郭」にたてこもって蝦夷(えぞ)共和国と称した。降伏したのは 1869 年。政府は、蝦夷地を北海道と名づけ、本格的な開拓を始める。魏の曹操のやり方をまねて、屯田兵という開拓を兼ねた部隊も組織した。寒い地方で困難な開拓だったが、それよりも、土地を奪われたアイヌの人々がたいへんな苦渋をなめた。1874 年、政府の大使になった榎本が、ロシアと、カラフト・千島交換条約をむすび、日本は千島列島を領有することになった。

また政府は、鹿児島藩に支配されていた琉球王国を、国内の藩を廃止したあとに琉球藩と呼び、従属藩とした。まだ清へ朝貢を続け、どちらに帰属するのか微妙な問題を残していたが、1879 年、王を廃し、日本の一部として沖縄県にした。日本の北と南の国境が定まった。

日本の近代化

文明開化という合言葉で、日本の近代化は続いている。1869 年に電信、1871 年に郵便、1872 年に最初の鉄道…というふうに、先進技術や制度がつぎつぎに導入された。500 名もの西洋人が雇われ、政府の顧問になり技師や教師

になる。たくさんの留学生たちが海を渡り、西洋式の大学がつくられ、近代化のための人材の養成が始まった。

初期に活躍したのは、幕末に洋学を学び海外に行った経験のある人たちだ。明六社に集まった森有礼・福沢諭吉・西周(にしあまね)などの啓蒙活動がよく知られている。福沢の書いた書物を多くの人が読んだ。西は、幕府によってオランダに派遣されて徳川慶喜に仕えたという経歴の人だが、西洋哲学を紹介し、哲学・理性・科学などの重要な西洋語を漢字に表現した。当時の人たちは漢学の教養が深く、日本語になかった多数の言葉を漢字でつくりだした。わたしたちが抽象的なことまで考えることができるようになったのは、先人のおかげなのだ。西洋の重要な書物がみな日本語に翻訳されていった。また、新聞が発行され、世論が政治を動かすようになる。

殖産興業というかけ声で産業の発展が図られる。基礎になる設備も人も元手の資本もないから、政府主導で、銀行をつくり産業を植えつけることから始まった。横須賀の造船所をひき継ぎ、各地にも造船所などを建設した。製糸工場や紡績工場をつくり、炭鉱や鉱山も開発する。民間の事業家が出るのも助けた。官営工場を民間に払い下げて、産業を広げることがなされた。つまり、西洋で数十年かけてできた産業革命を、政府主導で大急ぎでやろうとしたのだ。1800年代が終わる頃までに、軽工業でかなりの状態に進んだ。町からも村からも、元手を出してさまざまな事業を始める人たちが出て、地方もゆるやかに発展していく。明治初期から、西洋建築が建てられ、

東京では馬車が走りガス灯がともった。衣食の風習も変化していく。日本人の海外文明に対する好奇心が発揮される。ただ、地方の風俗が改まるには年月がかかった。

大久保が死んでも政治の方向は維持されたが、より多くの人たちが勢力をきそうようになっていく。政権から去った板垣たちは、藩閥政府を批判して国会をつくることを要求して、自由民権運動がわきおこる。1880 年頃には、憲法草案を提案する人も出て、運動は広く国民を巻きこんだ。これに対して、政府は集会条例を出して弾圧を加えた。他方で、立憲制へ移る必要を知っていた政府は、1890 年に国会を開設することを約束する。伊藤博文たちが、どんな憲法をつくるか学ぶためにドイツへ行く。自由民権運動の側の板垣や大隈は、自由党と立憲改進黨を組織した。1880 年代の経済不況の中で、対外強硬論と脱アジア論が強まって、政府は軍備拡張政策を強める。軍人勅諭がつくられ、その方向での思想的な統制を強めた。民権運動は下火になっていく。

1885 年、政府の体制が近代的な内閣制度に改められ、伊藤が初代総理大臣になった。伊藤たちはドイツ帝国をお手本に憲法を起草し、それに基づく政治体制が定まる。1890 年に、貴族院と衆議院とからなる国会が開かれ、大日本帝国憲法が施行され、立憲君主制が始まった。ただし、内閣総理大臣は、天皇に選ばれた数人の元老が推薦して、天皇によって任命されるのだ。大臣という言葉が、天皇の臣であることを表現している。貴族院議員は皇

族・華族・上級官僚・大資産家で構成された。衆議院議員は、一定以上の税を納める者だけによる選挙で選ばれ、ほぼ地主層や有産者階級で構成されていた。ほかに枢密院という天皇に助言する機関があった。こういう人々が、帝国憲法の下での政治を動かしたのである。民権運動を指導した板垣や大隈たちも、その中で重要な地位を得る。伊藤たちは政党を自分の主導できるようにしていき、日本もしだいに政党政治へ進んでいく。

1890年頃の日本の経済は、さっき言ったように、まだ軽工業中心で西洋列強ほどの産業の発展段階になかった。重工業を発展させる必要があった。製鉄所が一つあったが、官営の八幡製鉄所が操業を始めたのは1901年である。そういう条件にもかかわらず無理をして、日本は、西洋列強の真似をして海外侵略に乗り遅れまいとする。明治初期から、富国強兵がもう一つの標語だった。朝鮮へ支配を広げる政策を進め、清と対立して1894年に戦争をした。勝利すると、東アジアへの侵略をさらに進めていく。それは、北から勢力を張ろうとしているロシアとの戦争になる。1904年から1905年の日露戦争である。

東アジアの近代

朝鮮が西洋列強の圧力を受けて近代化を図ろうとしているところへ、一歩先に出た日本が外圧を加え始める。日本に征韓論があったことをすでに話した。1876年朝鮮は、日本に日朝修好条約を強制された。それは、日本が

合州国に修好条約を強制されたのに似て、不平等な条約だった。朝鮮は清に朝貢していたから、清は朝鮮を保護下に置く宗主権(そうしゅけん)を主張する。西洋列強ではなく、地理的に近い日清両国が朝鮮半島で勢力争いを始めた。政変・軍人の暴動・農民反乱など、危機的な状況を克服しようとする動きがあった。だが、日本と清が軍隊を派遣して介入する。朝鮮の近代化の歩みは大きくさまたげられ、日本など外国の経済的な浸食が進む。

1895 年、日本が日清戦争に勝利し、下関で講和条約がむすばれた。清は、朝鮮に対する宗主権を失い、台湾と澎湖諸島を日本に奪われた。多額の賠償金も支払った。大韓帝国と名を変えた朝鮮は、日本が日露戦争に勝つと、日本の保護下に入れられた。1910 年、20 世紀に、長い歴史を誇る文明国が、不幸にも日本の植民地にされた。

清は、第 2 次アヘン戦争後の 1860 年代から、近代化の努力を続けていた。ところが、フランスのヴェトナムへの侵略に対して宗主権を主張し、1884 年戦争をして負けた。10 年後には朝鮮をめぐる日本に負けた。賠償金は歳入の 3 年分に近い巨額だった。そのお金をヨーロッパ列強から借りるほかなかった。日本はそのお金を軍備拡張にまわす。清は、貿易でも債務からも、経済的に列強に従属するようになる。しかも、清の弱さが明らかになったことで、列強の中国侵略は激しさを増す。日本は、下関条約で遼東半島も割譲させたのだが、ロシア・フランス・ドイツの三国が干渉して、それをやめさせた。そ

の上で三国は、旅順・大連、広州湾、青島を占領した。イギリスも威海衛を占領した。列強は縄張りを決めて、鉄道施設権や鉱山の開発権を奪っていく。怒った民衆は団体をつくり、侵略に抗議する運動を起こした。義和団運動と呼ばれるその運動は広がり、1900年、北京や天津を占拠する。日本を含む8か国連合軍が北京に進軍して戦争になった。しかし清は連合軍に勝てない。また莫大な賠償金を払わされた。中国は半植民地のようになる。

中国は、資本主義の世界システムに組みこまれて数十年になる。それは大きな富を海外へ奪われることであるけれど、中国内での商品経済と国内市場との拡大でもあった。それにつれて社会も大きく変化していった。象徴的に、上海は東アジア第一のヨーロッパ的な都市に変貌する。商業・工業が発展し、さまざまな近代的な制度が取り入れられていった。苦しい状況ながら、中国の近代化が進んでいったのである。

日本との戦争に負けたのは、中華帝国にとって大きなショックだった。改革の必要性がもう一度認識された。すぐに1895年から、西洋式の新軍が編成されていった。1896年、新しい大学も設立され、初めて中国人留學生が日本に行った。外国との戦争が足踏みさせたけれど、清朝も改革にとり組まざるをえない。科举制度などをやめ、さまざまな領域で制度が変更された。1905年には、在日中国人留學生は8000人いたそうだと。有名な人では、魯迅や周恩来も日本に留学し、蒋介石も日本の軍隊で学んだ。

西洋の書物が中国語に翻訳されたが、留学生たちが日本語で学んだ考え方や言葉もたくさん中国に持ちこまれた。さっき話した日本製漢語の哲学や共和国・共產主義など現代中国でも重要な言葉がそうだ。それらの言葉を数え上げるのがむつかしいほどだ。中国と日本は不幸な関係をたどるけれど、漢字を使い共通の言葉も使う縁の切れない間柄なのだ。

清朝は、多額の貸しつけを受ける列強に経済的に従属している。この状況を変えるためには、体制を変えることつまり中国語でいう革命が必要だという考えが生まれる。清王朝を倒すことをめざすいくつもの団体ができた。清政府に弾圧された革命家は、日本の東京に亡命して活動をつづける。集まった革命家たちは、1905 年東京で、孫文を総理とする中国同盟会を結成した。当初から革命運動の先頭に立っていた孫文は、「三民主義」すなわち民族主義・民権主義・民主主義をかかげて、失敗を重ねながらねばり強く運動を進める。

新しく編成された西洋式の新軍は 17 万人になっていた。孫文の働きかけはその新軍を動かす。1911 年、清は内閣制度を始めたが皇族内閣だった。不満が爆発して、長江中流域の武昌で新軍が蜂起し、多くの結社も集合して政権を組織した。革命が始まった。すぐに各地で蜂起が続き、1 月のうちに 12 の省都が清朝から離れた。清朝は、総理大臣を北部の軍をにぎる袁世凱に変える。革命側は南京を落とし、1912 年、帰国した孫文が大総統になって

中華民国を建てる。まだ臨時政府だが、清朝軍はそれを制圧できない。孫文と袁世凱のあいだで、電報を使っての交渉がおこなわれ、妥協が成立した。袁世凱は、まだ子供の宣統帝を退位させて共和国にすることと引き換えに、自分が大總統になる。長い歴史をもつ中華帝国が終わった。1911年の干支(えと)で表現して辛亥(しんがい)革命と呼ぶ。当然ながら、清の年号を使わない。

民国政府は、共和国を保つための法律を制定したあとで、北京に引っ越した。大總統は袁世凱である。政党がつくられて、中国最初の国会選挙がおこなわれる。ところが、大總統の与党は孫文たちの国民党に負けた。袁世凱は、国民党の指導者を暗殺し、列強の支援をとりつけて、自分の支配する軍隊で権力を保つ。国民党が南京で蜂起したが、こんどは民衆の協力を得られなくて敗北し、孫文たちはまた日本に亡命した。こうした中1914年、第一次世界大戦が始まる。日本は、ドイツの租借地の青島を攻めて占領し、西洋列強の手がまわらないすきに、21か条の要求を中華民国に押しつけた。中国の苦しみは続く。そんなときに袁世凱は皇帝を称したが、反対が多くてとりやめている。彼が死ぬと、軍隊をにぎった軍閥が各地域を支配して、中国は分裂状態になった。

孫文が死んだあと、国民党を主導したのは蒋介石である。各地の軍閥を従えるため、広州から北へ攻め上る北伐を始める。まず南京を占領し、南京政府を建てた。死ぬ前の孫文は共産党と協力するようになっていたが、蔣

介石は共産党と対立し弾圧した。分裂していた国民党の別の地方政府と合同すると、1928年、また北伐が始まった。北京を支配していたのは張という軍閥で、国民党軍に押されて東北地方(満州)に逃げた。当時、ロシアから遼東半島と南満州鉄道を奪っていた日本は、東北地方の支配を強めようとしていた。日本軍は、張の乗った列車を爆破して殺す。一方、北伐軍は北京に入城する。東北地方の支配権をひき継いだ張の息子の張学良は、愛国的な立場から、南京の国民党政府に服属することを宣言する。こうして1928年、中国を統一した中華民国が成立した。だが、日本が中国侵略を本格化しようとしている。蒋介石は、他方で、いくつか拠点を築いていた共産党をつぶそうとする。

ここでヴェトナムのことにも触れておこう。ヴェトナムの北部は、古くからしばしば中華帝国の支配下に置かれ、中国文明圏の中にあった。文字は漢字を使っていた。そこへ、1800年代後半フランスが侵略してきたのだ。もちろん抵抗運動があった。1930年、ホー・チミンという人がヴェトナム共産党をつくって、独立運動を始める。フランスや世界をめぐる人で、中国で活動していた頃の変名が胡志明(ホー・チミン)だ。父は儒学者で、彼自身も漢詩を詠んでいる。フランスの支配が長く続いたせいで、ヴェトナム語をローマ字で表わすようになった。朝鮮半島でも漢字表記をやめてハングルを使うようになったから、漢字文化を保っているのは中国と日本だけである。

大日本帝国の行方

日本帝国という言葉は、ドイツ帝国と同じく、帝国の拡大主義を最初から色濃く帯びている。「日出るところの天子」という意気高い調子の国書を隋に送ったあとも、公式に日本に大の字をつけたりしなかった。帝国憲法を起草した人たちにもそれは尊大に聞こえたのに、大日本が採用された。言葉にこだわるようだけど、世界の歴史をふり返れば、一国の長期的な進路はその基本的な姿勢によって左右される、という教訓に気づく。

日本が変わったのは日露戦争が終わってからだという意見がある。たしかに、明治維新の頃には、木戸や大久保は大局観をもち柔軟だったように見える。けれども、近代天皇制は、江戸時代の内向きの考え方に根ざす皇国思想に、近代の帝国主義を接ぎ木して新しくつくられたもので、それが初期から日本の方向を決めたと言うことができる。それでも、憲法を起草した伊藤たちは天皇を国家の機関のように見ていた。ところが、教育勅語など、権力を強めるためのイデオロギー教育がずっとおこなわれた。それが、世代が変わるにつれて、日本の針路を決定する人たち自身を世界に通用しない思想に染めて、遠くを見通す現実感覚を失わせた。

多くの日本人は、明治維新後の発展を過大に評価しているけれど、アメリカ合州国の急速な成長に比べればそれほどではなかった。だから、あるいはそれなのに、西洋列強が帝国主義的な海外進出をするのを真似した。その海外が隣国だったことが、不幸を深刻にする。

B. 近代の世界、産業の発展と帝国主義

帝国主義の領土獲得競争

イギリスやフランスはすでに領土拡大を進めていたが、1870 年頃ヨーロッパ諸国の国の体制がととのうと、海外への侵略がいっそう激しくなった。西洋の産業の発展は、それまでの貿易とは違う経済的な侵略をうながす。原料その他の輸入先としてだけでなく、本国で生産した工業製品の輸出先として支配地を求めた。交通は発達し、鋼鉄の軍艦も登場してきた。条件はそろっていた。

イギリスは、1877 年にインドを帝国と呼び支配を強化した。さらにアフガニスタンを保護国にする。スエズ運河の株式を買って支配権を獲得し、やがてエジプトを保護国にする。フランスは、アルジェリアの隣のチュニジアも保護国にした。東南アジアでは、英・仏・蘭の三国が、タイをのぞくそれぞれの領土の統治を強めた。日本と西洋列強の朝鮮・中国への侵略はもう話した。ロシアは、中央アジアで、今地図でたどることができるほどの領域を征服し、清との国境を東に押し出した。アフリカ大陸のことは話すゆとりがなかったけれど、1900 年前後までに、ヨーロッパ諸国が早い者勝ちのように切り取った。眼をおおうほどだ。彼らは、太平洋の島々も奪い合った。以上のすべての国々に、近代に植民地化された傷が今でも残っている。

国外に領土を広げるのは昔から帝国のあり方だったが、

1800年代の末、発展した資本主義経済と市民の政府が、領土を獲得しようとする欲求を新たにする。それは帝国主義と呼ばれている。この帝国も、領土獲得のために大きな戦争をすることをためらわない。

まずイギリスがアフリカ南端の地域を手に入れた。そこには1600年代以来オランダ人が入植して国をつくっていたのを、1880年から1902年にかけての長い戦争で征服したのである。今でも南アフリカ共和国の人口の半分近くがオランダ系だ。1894年日清戦争があった。1898年アメリカ合州国は、スペインと戦って勝つと、カリブ海を自分の勢力圏に入れた。そこから、のちにアメリカ大陸全体が合州国の勢力圏に入ることになる。太平洋ではスペインからフィリピンを奪った。1904-1905年の日露戦争もこの種の戦争だ。日本はアメリカやイギリスから軍資金を借りてなんとか勝つと、カラフト島の南部を取り、戦場だった中国東北地方のロシアの権益を奪ってそこを勢力圏にした。今からふり返れば、日本にとって泥沼への道の一里塚である。1911年、イタリアがオスマン帝国と戦ってリビアを奪う。古くから文明の栄えた北アフリカが、フランス・イタリア・イギリスの支配下に入れられてしまい、発展をさまたげられる。

列強に支配されたどこでも、独立を求める運動や反抗があったことを言い忘れてはいけないだろう。朝鮮の人々は、上海で大韓民国臨時政府をつくっている。そういう運動の中から、近代の「民族主義」が生まれてくる。社会を構成する大衆のつくり出す運動だ。

1870 年から世界大戦までのヨーロッパ諸国

先頭を走っている大英帝国イギリスは、経済・文化などあらゆる分野で繁栄の成果を受けとっていた。ロンドンは世界最大の都市で、探偵シャーロック・ホームズが活躍したのはその頃のことだ(笑い)。相棒のワトソンがアフガニスタンの戦争から帰ってきたことを見抜いている。じつは、イギリスは転機を迎えつつあった。ドイツや合州国が経済的に追いついて、世界市場での優位がうすらぎ始めた。たとえば、鉄鋼の生産で追い越される。経済不況も生じた。ただし、まだロンドンが金融の中心である。穀物の輸入制限を廃止したあと、イギリスは農産物の輸入国になっていた。他方で、選挙権が農村のより多くの人々にまで拡大される。それらは、政治のあり方にも影響して、伝統的な地主階級の力が衰えていき、資本家や中産階級の勢力が増した。組合運動がさかんになり社会主義団体もできた。1900 年代に入ると労働党が結成され、連立政権に参加するほどになる。こうして、政治体制の民主化が進んだ。

こうした状況が、19 世紀の終わり頃イギリスの海外進出をいっそう強めたのだろう。20 世紀になると、成長してきたドイツと対抗する路線を進み、軍艦の建造などの軍備拡張の競争になっていく。

フランスは、イギリスを追って 1870 年頃までに産業の発展をとげ、海外侵略をいっそう強めたのである。フランス革命 100 周年の 1889 年、パリで万国博覧会を開いた。

巨大な建造物であるあのエッフェル塔は、今から考えるとそんな昔に建てられたのだ。映画が発明され、写真に色がつくようになった。イギリスのところで言わなかったけれど、経済の膨張は、資本を海外に投資して利益を出す活動を生む。フランスも、外国の産業などに投資し、公債をたくさん買った。とくにロシアへの投資が大きかったようだ。それはロシアとの政治的な結びつきを強くする。フランスにとって、国境を接するドイツとの関係がいつも最大の問題だった。1870年のプロシアとの戦争では、昔ドイツから奪った地域を取りかえされている。帝国主義的な考えの支配する時代に、フランスとドイツの対立はほとんど必然だった。それはイギリスとの同盟へ向かわせる。

ドイツは、遅れて産業化を始めた。統一が果たされると、国家が主導して強力に工業化を進める。イギリスやフランスがいち早く発展しているとき、十分な資本をもつ企業家は少なかった。そこで、銀行に集まるお金を集中的に産業に投資することがおこなわれた。遅れて工場をつくるドイツでは、最初から進んだ技術を導入する。科学と技術が歩調を合わせて進展する。急速な発展は独占企業を生みだし、やがて、電機や化学品を生産する重工業が、世界の最先端になるほど発展した。産業の規模はイギリスを追い越した。燃料が機械の内部で燃えて出るエネルギーを直接動力にする内燃機関は、1850年頃からつくられるようになっていたが、1880年代にドイツで

それを使う自動車が走り出した。ガソリン自動車の発明者とされる二人のドイツ人の名が分かるかな？ ヒントはドイツの自動車会社の名にある。

産業化が社会を変える。労働者が増えて、マルクスとエンゲルスを生んだドイツの社会主義勢力は、社会民主党として大きな勢力に成長した。だが、いつも支配勢力とのせめぎあいがある。しかも、帝国主義的な国家主義が、ドイツの経済的な発展とともに強くなっていく。ドイツの姿勢は、イギリス・フランス・ロシアとの対立を生み、西と東から包囲されて、軍備拡張の政策へ進む。ドイツは孤立を深め、社会民主党も帝国主義的な対外感情にのみこまれていく。

近代オーストリアは、南に領土を広げ、1870 年前に、自治権を与えたハンガリー(マジャール)と一対のオーストリア・ハンガリー帝国になった。ここでも経済がかなり発展した。ハンガリーの首都ブダ・ペストで 1890 年代にロンドンに次ぐ地下鉄がつくられている。ウィーンは文化の一つの中心地として栄え、19 世紀が終わろうとする頃、世紀末の気分にも染められた文化を生んだ。この帝国に含まれるチェコで、20 世紀にドイツ語で作品を書いた F. カフカの名をあげれば、その反映が少し分かるだろう。領土内に、ドイツ人・マジャール人と系統の異なるスラブ系の人々が占める地域がいくつもある。その頃から現代に続く民族問題があったのだ。スラブ系のロシアがそれをあと押しするので、帝国はドイツと同盟する。

ロシアは、クリミア戦争で負けて、近代化にはげんだ。農奴だった農民が、働き手として少しずつ経済にかかわるようになる。商品経済が発展し、労働者になる農民が増えて工業が進展した。この間、ウクライナなど西部の国々の支配を強化した。ロシア支配下のポーランドで、制約を受けた知識層の家庭から若い女性がパリに行ったのはその頃のことだ。結婚してM. キュリーになった人は、ノーベル物理学賞と化学賞の二つももらったね。

さて、ロシアは 1890 年代に工業を大きく発展させた。労働者階級が増える。しかし遅れて発展し、その発展がまだ途上にあったロシアでは、日本と同じように、労働者や農民の状態はよくなかった。改革運動は弾圧され、革命運動に移っていった。いくつかの組織がつくられた。社会民主労働党もそういう一つである。日露戦争のさなかに、軍隊が労働者のデモ行進に発砲する事件が起きている。政府は革命運動を弾圧したが、宮廷と政府に対する非難は広がっていく。経済はその間も発展を続ける。さっき話したようにフランスの資本がそれを助けた。ロシアは、イギリス・フランス側につくことになる。

アメリカ合州国の台頭

アメリカ合州国の人口は、おおよその推定で、1820 年に 1000 万人、1870 年に 4000 万人、1913 年に 9800 万人である。いかに多くの人々が渡って来たかを物語る。大部分がヨーロッパから来た人々だ。これらの人々は、太平洋までに広がった広大な領土に定住して、社会を建設

していく。東北部は、経済的に進んだ地域としてますます産業を発展させた。大きな農業人口の成長とうまく連動して、産業の発展は飛躍的だった。それが、合州国を勢いある帝国主義の国にしたのだ。20 世紀までにイギリス・ドイツを追い越し、世界一の工業国になった。

合州国の文明を特徴づける発展を見てみよう。1800 年代に電磁気学が発展したら、1800 年代後半には実用化されるようになり、今日の電気の時代が始まった。アメリカ人は自由闊達(かっただ)に新しい道具を発明する。蓄音機や電球を発明した人のことは誰でも知っている。電球の最初のフィラメントは、日本の竹を焼いて作ったそうだ。1876 年電話機がつくられた。発電機と電動機が実用化されると、電力で動くものが現われる。たとえば、古い映画に扇風機が登場する。エレベーターやエスカレーターを始めたのもアメリカ人だ。20 世紀より前にヨーロッパで無線電信が実用化され、20 世紀になると、合州国でラジオ放送が始まった。日本に登場するのはおじいさんが生まれたあとだけど、電気洗濯機や電気冷蔵庫も 20 世紀の初めにアメリカで実用化されている。おっと、初めて飛行機が飛んだことを言い忘れるところだった。

部品などの工業製品は規格化されて産業の統合を助ける。H. フォードが大量生産システムを開発して、自動車をととても安く売り出したのは 1908 年のことだ。価格の安い製品は多くの消費者を得て、産業はますます発展する。20 世紀の大量生産・大量消費の経済が始まる。大衆文化が世界に広がり、社会の状態が変質していく。

C. 二つの世界大戦

最初に、近代各国の人口の変化を表にして見せよう。各国が総力をあげて競争するとき人口はとても重要な指標だから、今話している時代の情勢が分かるだろう。

各国のおおよその人口の推移 (単位: 百万人)

| | 米 | 露 | 英 | 仏 | 独 | 伊 | 日 |
|--------|-----|-----|----|----|----|----|----|
| 1870 年 | 40 | 89 | 31 | 38 | 39 | 28 | 34 |
| 1913 年 | 98 | 156 | 46 | 41 | 65 | 37 | 52 |
| 1950 年 | 152 | 180 | 50 | 42 | 68 | 47 | 84 |

第一次世界大戦と戦後のベルサイユ体制

日露戦争後、イギリス・フランス・ロシアが友好的なのに対して、ドイツとオーストリア・ハンガリー帝国の同盟が対抗するようになった。1912 年から 1913 年にかけて、バルカン半島の諸国が領土をめぐる複雑な戦争をした。オスマン帝国は、ロシアやイギリスに脅威を感じているから、ドイツと手をつなぐ。

1914 年、ボスニア・ヘルツェゴビナのサラエヴォで、オーストリアの皇太子夫妻がセルビア人の銃弾に倒れた。対立に火がついて、第一次世界大戦が始まった。ドイツは、中立国のベルギーに侵入してフランスに攻撃をしかけたが、西部戦線はまもなく勝敗のつかない戦いになる。東ではロシア側に侵入したが、初期の勝利以上の戦果をあげられない。戦争は消耗戦になって、国力の優劣をきそう戦いになる。どちらの側も国内で軍需物資の生産に

つとめ、国民を総動員する体制をつくるのに懸命であった。小説を映画化した「西部戦線異状なし」を見る機会があるだろう。若いドイツ兵が塹壕(さんごう)の中から蝶に手をさしのべて撃たれた日の報告は、戦線に異状なし。そのシーンが戦争の無残さを告発する。

戦争を有利にするために、さかんに裏で取りひきがおこなわれた。たとえば、ドイツと同盟していたイタリアが、英・仏側について戦うことになる。イギリスは、将来のよい条件を約束してアラブ人を味方につけた。そういう中、1917年、ロシアで革命が起きた。ドイツは、スイスに亡命していた革命家レーニンを列車でロシアに送り届ける。すると、レーニンの指導する社会民主労働党の左派が、第二の革命に成功してソヴィエト政権を建てた。ソヴィエト政府はドイツと講和条約をむすび、戦争での「無併合・無賠償」と「民族自決」を提唱する。ところで、大国アメリカ合州国は、1915年に客船がドイツの潜水艦に撃沈されたが、中立を保っていた。しかし、合州国は英・仏に多額のお金を用立てているし、ロシアや日本の動きを気にして、1917年に参戦する。1918年、合州国軍の加わった連合軍はドイツ軍を圧倒した。終盤戦ではかなりの戦車や飛行機が戦場に登場している。

1918年、オスマン帝国がパレスティナから北上したイギリス軍に降伏した。するとオーストリアが戦意を失って休戦し、皇帝はスイスに亡命した。同じ時期、負けがはっきりしたドイツで、兵士たちの反抗が起きて革命に

発展した。皇帝はオランダに亡命する。ドイツは、合州国大統領 T.W. ウィルソンの提唱する理想主義的な「平和原則」を頼りに、連合国に屈服した。近代兵器を使う戦争は以前とはまるで違う。戦死者は 900 万人にのぼる。兵士以外の死者は 1000 万人いただろうと言われている。

1919 年、講和の交渉がおこなわれた。ドイツは期待に反して過酷な罰を受ける。莫大な賠償金を負担し、フランスと取りあいをしてきた地方を失い、東ではダンツィヒなどの中世以来の広い領土を失った。ドイツの新しい国境の東で、フィンランドからポーランドまでの 5 国が独立した。オーストリア・ハンガリー帝国は解体されて中ぐらいの二つの共和国になり、チェコ・スロヴァキアが独立し、バルカン半島の国境が書き換えられた。ベルサイユ条約と呼ばれるこの講和条約が、戦後世界の体制を決定づける。まもなくアイルランドが、北部をのぞいて自由国になる。ヨーロッパの中・西部では、現在までこの体制が続いている。日本が中国でドイツの利権を奪ったことはもう話した。中華民国はこれに反対して条約に調印しなかった。日本は、ドイツのもっていた西北太平洋の島々の統治権も得た。

ウィルソン大統領の提唱で、戦争を終わらせ国際的な協調体制をつくるために、国際連盟ができた。ところが、提唱したアメリカの議会が加盟に反対した。主導すべき最強国が抜けて、決議を実行させる強制力もなく、国際連盟は世界に平和をもたらすことに成功しない。

イギリスは、エジプトを拠点に西アジアでも戦争した。有名なアラビアのロレンス、情報将校 T.E. ロレンスは、イギリスの正規軍ではなくアラブ人の中に入って、オスマン帝国に対するゲリラ戦を指導した。彼のドキュメンタリ作品『知恵の七柱』はその知性を示している。ロレンスが助けたのは、メッカのある紅海東岸の領主の家の者で、戦後、イギリスによってイラクとヨルダンにできた国の王にしてもらう。しかし、イギリスとフランスは、この地域の支配権を手放さない。シリアとレバノンの二国は、フランスが支配してできた。

オスマン帝国は切り取られそうになった。いったん、いくつもの地方を占領され、ギリシアが古代のようにアナトリア半島の西岸に進出した。だが近代化されたトルコ人たちはそれに屈服しない。ケマル・パシャという人の指導する祖国解放運動が起こる。アンカラに国民政府を建ててオスマン朝を倒し、トルコ共和国を成立させた。カリフ制を廃止し、イスラーム教から脱して世俗化を進めた。憲法を制定し、大胆な改革を実行する。イスラーム暦も女性のスカーフもやめ、アラビア文字からローマ字を使うトルコ文字に変えた。こうして、西アジアのほかの国と違う今のトルコができたのだ。

ロシア革命からスターリン専制体制へ

1917 年、ロシアには帝政を変革したい政治団体がいくつもあり、政府に近い人々も改革の必要を感じていた。ドイツとの戦争に苦戦して、首都ペトログラードは食糧

難などで混乱していた。そこに50万人近くの兵士と、40万人近い労働者がいる。ロシアの暦で2月に、「パンをよこせ」というデモ行進から町中のストライキに広がり、兵士の反乱が起きた。国会が臨時政府をつくり、皇帝は権力を失った。2月革命と呼ばれる状況の中、ロシア人がソヴィエトと呼ぶ実行委員会のようなものが労働者や兵士を組織して活動する。農民は貴族の館を襲う。

事態の進展は急だった。帰国したレーニンは、ソヴィエトの連合が権力をにぎるという方針を出す。彼のひきいるボリシェビキというグループは少数だったけれど、ほかの政治団体と組み、農民の支持も得て、急進的な行動を成功させていった。10月、兵士がソヴィエトを支持して臨時政府を倒した。こちらを10月革命と呼ぶ。ボリシェビキは、さらに、ほかのグループを排除して権力をにぎり、社会主義のソヴィエト共和国を宣言した。国内で反対派の軍隊と内乱になり、外国も軍隊を送ってこの社会主義革命を倒そうとした。日本もシベリアに軍隊を送っている。しかし、ソヴィエト政権は倒れなかった。レーニンの「民族自決」という考えがスターリンの一つの共和国という考えに勝って、民族的な地域性をもつ共和国の連合したソヴィエト連邦ができた。

まもなくレーニンが倒れて、彼が後継者にしなかったスターリンが共産党の実権をにぎった。スターリンは、党内の敵対者を排除して強権をふるう。政権は、工場を国有化し、国が経済計画を立てて産業を発展させる

政策をおし進めた。これは、戦争で衰えていた産業を復興させる。農業では、個人経営の農民をなくして生産協同組合を組織した。西ヨーロッパの諸国よりも領土が広く人口の多いソヴィエト連邦は、大きな工業国に発展していった。しかし、スターリンは強圧的で、文化にまで締めつけが及んだ。彼が死んだあとに外国がその実態を知ることになるのだけれど、1930年代の弾圧政治はひどいもので、政府や軍隊の要人までじつに数十万人が殺され、多数の人々が強制収容所に送られた。

次の大戦までの戦間期

フランスとドイツの対立は尾を引いていろいろ事件が起きている。ドイツは多額の賠償金を払うのに苦勞し、戦前のお金1マルクが1兆分の1の価値になるという信じられないインフレーションが起きた。人々の生活は混乱し、四苦八苦しただけに違いない。戦争前に外国からの借金があった合州国は、戦後は貸付の多い債権国になった。お金をドイツに貸して、ドイツはフランスとイギリスに賠償金を返し、英・仏はそこから合州国へ借金を返すということも起きた。世界システムの中心がニュー・ヨークへ移り、経済がそれまで以上に世界を結びつける。

日本は戦場の外にあって貿易量を増やし、産業が発展して経済規模が大きくなった。造船業をはじめ重工業が発展し、軍艦や戦闘機をつくれるほどになった。ただし、1940年になっても輸入元の一位は合州国で、日本は合州国を中心とするシステムの一員にすぎない。

アメリカ合州国の発展のところで話した社会状況が世界中で進んだ。多くの発明品が生活の中に入りこみ、大量の製品が世の中をおおう。合州国を先頭に社会の変化が進み、世界がそれにならう。日本でも、鉄道網は広がり、自動車が通りを走る。電話が普及して、ラジオが家庭に置かれるようになる。関東・関西の大都市には交通網が広がり、人々が通勤に使い、デパートで買い物をする。つまり、まだ始まったばかりだけど、世界中に、それ以前よりもむしろ現代につながる生活が普及していったのだ。会社や商店に雇われて給料で生活する層が増え、給料の多い人々は中産階級に加わって大きな階層に成長した。そういう人々が新しい製品を買って消費が拡大する。大量生産・大量消費の社会ができていく。

政治状況が現代に近づく。選挙によって政権を担当する政府をつくるのだが、その社会で経済的に有力な勢力が選挙に勝つというのが一般的だった。フランスのように貧しい大衆が選挙権をもつ普通選挙でもそうだった。現代もこの傾向は変わっていない。どの国でも戦前の政治では、裕福で評判のよい「名望家」が国会の議員に選出された。政策について進歩派と保守派ができるから、政党に分かれて、選挙で多数をとるためのさまざまな策を尽くす。そういう議員から、政党の中で指導力のある人たちが政府の要職についた。他方で、雇用される人々や労働者が増えて、社会主義の政党がつけられた。政治の安定したイギリスでは、労働党の政権ができるまでに

なった。フランスでは、政情はあまり安定せず、左翼連合の政府ができた。戦後共和国になったドイツでは、ワイマール憲法という当時最も民主的と評価された憲法ができていたが、定着する時間のないうちに暗雲がたちこめる。もっとも、古代ギリシアの時代から、市民の選挙が賢明な政策を選ぶとは限らない。民主的な選挙で乱暴な政策に進み、戦争を決めることさえ起きるのだ。

日本でも、大正年間に民主主義の発展を期待させる状況が生まれ、大正デモクラシーと呼ばれた。それにつれて、多数をとった政党かその連合が、内閣を組織して政権を運営する慣例ができていった。成人男子全員に選挙権が与えられたのは1925年である。ただ日本では、明治維新以来、優秀な官僚が政府の実務をとりおこなうことが続いて、上級官僚が政治家に転身する習慣があった。上級官僚が必ずしも見識が高くなってもこの慣例は続き、戦後まで残ってしまう。その出身階層の中心には地主層がいて、事業に成功した人々が加わった。地方でも彼らが、町長や村長になり、議会の議員になった。だから、ほぼ確立した支配層が政治を主導する体制が続く。日本にも、労働組合や農民組合、社会主義の団体ができたけれど、治安維持法がその運動を弾圧する。

しばらく、世界に比較的安定した状態があった。生活が向上し、近代文明の成果を楽しむという風潮が世をおおう。抽象的な絵画が生まれ、超現実主義などというそれまでにない表現の芸術が現われた。他方で、モダンな

ファッションが流行するなど大衆文化が人々をとらえた。映画館で映画を楽しみ、スポーツ競技を観戦するようになった。プロ野球のチームが日本にもできる…。

そういうある日、ニュー・ヨークの株式市場で、急に株価の下落が起きた。1929年、世界大恐慌が始まった。お金の流れがとどこおり、またたく間に各国に不況が広がった。どの国でも、企業の資金ぐりが苦しくなってたくさんの会社が倒産した。1930年代は、それから立ち直るのに苦勞する時代になる。合州国では、政府が予算をつぎこむ大規模な公共事業によって、資金を市場に投入した。ニュー・ディール政策として知られている。いくつもの国を含む大きなイギリス連邦は、その領域を囲って経済を守る政策をとった。植民地の多いフランスも同じような政策に進んだ。合州国は、アメリカ大陸を経済的な勢力下に置いている。ソヴィエト連邦は広大な国で計画経済をおし進める。列強各国が、経済的なブロックを形成して対立するようになった。世界の雲行きが怪しくなる。

全体主義国家の出現：ファシズムと軍国主義

それよりも前のイタリアで、ムッソリーニという男が権力をめざす過激な行動を始めた。制服を着て武装した行動隊が通りを行進するというような、暴力的な威圧を加えて勢力を拡大した。国会の議席数は少なかったのに、1922年、武装集団のおどしに、はやばやと国王がムッソリーニに政権を与えた。その政党をファシスト党という

ので、このように理不尽で暴力的に権力を奪い、強圧的に国を支配するやり方をファシズムという。

ドイツでもナチ党というのが結成されたが、ヒトラーという男がナチ党を牛耳るようになると、さらに大々的なファシズム運動を展開した。1932年、総選挙で第一党になるということが起きた。ラジオを使って大衆をあおり、政治の関心を反ユダヤ人感情などにそらす。そこには宣伝省がつくられる。首相になると乱暴に権力を強め、ついに1934年、総統になって独裁権をにぎる。

ドイツとイタリアの過激な活動が伝わる頃、大日本帝国がファシズムに感染した。ここで戦闘行動隊の役目を果たしたのは軍部で、美しい日本を独り占めにする国粋主義者やその仲間たちが宣伝を受けもった。軍を指揮する統帥権(とうすいけん)は総理大臣になく天皇にある、ということにされていた。1931年、中国の東北地方(満州)にいた日本軍の将校が、命令系統を無視して陰謀をめぐらし、軍隊を動かして満州を占領した。政府はあとから追認し、中国の中心部でも中国軍と衝突する事件を起こすようになる。軍の若い将校たちが、1932年5月15日と、1936年2月26日に軍事行動を起こし、大臣を殺害した。この威圧で軍部が実権をにぎるようになる。ほとんどの政治家たちは、理念を失ってそれに屈伏していく。戦争をおおる者が急激に増えていく。

日本では天皇がいるから独裁者は出なかった。その代りに、日本伝来の合議制のやり方で集団的にかもしださ

れる雰囲気のにめり込んでいく。天皇が頂点にあるのに、天皇機関説に従うかのように頂点から主体的な決定は下されなかった。中心部は言わば空虚だった。軍部が戦争へかりたてたので軍国主義と呼ばれるが、自由主義者まで弾圧するやり方はファシズムだ。帝国憲法を起草した人たちが考えてもいなかった体制になった。

これらの国では、打ち立てた体制全体に対する個人の権利を弾圧したので、全体主義ともいわれる。ソヴィエト連邦のスターリン体制もそれに含まれる。

第二次世界大戦

対立が深まると、ドイツ・イタリア・日本は三国同盟をむすび、イギリス・フランス・合州国との戦争への道へ進む。英・仏・米の連合国も帝国主義的な海外政策をとっているけれども、歴史のある民主主義を保ち、独・伊・日のファシズムに対して民主主義を守るという構図になった。あるいは、全体主義に対し自由を守るという大義名分をもつことになる。じつは、三国同盟は社会主義を弾圧し、ソヴィエト連邦が憎い敵であった。しかし、東西二正面で戦争するのは危険だから、戦争を始める前に、ドイツはソヴィエト連邦と不可侵条約をむすんだ。日本もそれにならう。

戦争は日本が中国で始めていた。1931年の満州侵略以来、日本軍は上海で軍事行動を起こし、北京・天津あたりにも進出していた。1931年から一つの戦争と見る見方からすれば、日本は15年戦争を戦ったのである。1936

年、イタリア軍がエチオピアへ侵略を始めた。ヨーロッパでの戦争はスペインで始まった。1936 年、ファシズムに対抗する統一政府に対して、将軍が反乱を起こした。政府を助けるために、ヨーロッパや合州国から義勇兵が行っている。E.M. ヘミングウェイもその一人だ。体験を小説『誰がために鐘は鳴る』に書いて、映画にもなった。ナチスのドイツは反乱軍を助け、軍隊にではなく町を爆撃するという行動に出た。P. ピカソの大作「ゲルニカ」は、それに抗議するために描かれたのだ。結局、反乱を起こした将軍がスペインの独裁者になってしまう。

1937 年 7 月 7 日、北京の郊外で銃声が響き、日本が中国と戦争を始めた。平時に 20 万規模だった日本軍は何倍も増強されていた。軍人はそれだけの大軍を動かしてみたかったのかもしれない。日本軍は平野部の広い地域を占領する。しかし、蒋介石の国民党政府は内陸部の重慶に移って抗戦した。飛行機で重慶市を爆撃したが、広大な大陸での戦争に日本軍は勝利できない。

ドイツは、オーストリアを併合しチェコ・スロヴァキアを占領したが、1939 年、ポーランドに侵入し、ソヴィエト連邦と占領地を分け合った。イギリスとフランスがドイツに宣戦を布告して、第二次世界大戦が始まった。ドイツ軍はまたベルギーからフランスを攻め、1940 年、英・仏両軍を大陸から追い落とし、西のフランスなどと北の諸国を占領する。日本はフランスのインドシナ領を占領した。1941 年 6 月、ヒトラーは不可侵条約をやぶり、

ドイツ軍の機械化部隊がソヴィエト連邦へ攻めていく。第一次大戦のときよりも奥深く進軍した。日本は、中国で手づまりになり、合州国をはじめとする経済的な封鎖に苦しんでいた。日本の軍部は、ドイツのすばやい進軍を見て合州国との戦争を決意する。ハワイの真珠湾を奇襲したのは1941年12月8日。この日、この攻撃を知ったイギリスの首相 W. チャーチルは、「これで戦争に勝った」と喜んだ。世界最大の生産力を誇るアメリカ合州国が総力戦に加わって、連合軍の勝利が決まった。

ソヴィエト連邦は戦車などの武器の生産に励んでいた。1942年冬、ドイツの東部戦線で勝敗が逆転する。1944年6月、西部戦線で、連合軍がイギリス海峡を渡ってフランスに上陸した。8月パリが解放される。6月、サイパン島が米軍の手に落ちて、日本への空襲が始まった。ドイツも空襲される。太平洋では、日本の軍人は降伏を禁じられて、全員戦死することが起きていた。敗戦の中で、真実を語る言葉が失われていった。いつか、モンペ姿の女性が崖から飛び降り自殺をする映像を目にすることがあるだろう。守るべき兵士がみな死ぬとき、人々にはそれしかなかった。次の年沖縄でも、多くの住民が無慈悲に死に追いやられる。

勝敗がついているのに、1945年になっても、ドイツも日本も降伏しない。ドイツはヒトラーの死を待つしかない。日本では、天皇の側近などが降伏を考えるようになったが、誰も責任をひき受けて勇敢に行動することをた

めらっている。何十万もの人々がなお死んでいく。3月、米軍が綿密な計画を練って東京を爆撃した。一晩で10万人が死んだ。ドイツも日本も自分たちの始めた都市爆撃に対して、目も当てられない報復を受けた。4月、米軍が沖縄に上陸。5月、ソ連軍がベルリンに到達。7月、ドイツのポツダムで、ソヴィエト連邦も同意の上で、合州国・イギリス・中国が日本に無条件降伏を要求する宣言を出した。そして8月、広島・長崎へ原子爆弾が投下された。ソ連軍が満州に侵入し、武勇を自慢していたその日本軍は逃げる。8月15日、日本はポツダム宣言の受け入れを発表して、やっと降伏した。終戦と呼んでいるけれど、正確には敗戦である。日本人はアメリカに負けたと言う。じつは日本は、ナポレオンと同じく、人口の多い広大な国、中国にも負けたのである。

第二次世界大戦の犠牲者は、信じられないほどの数になった。日本軍の戦死者230万人、市民80万人。日本の侵略した中国で、軍人130万人、まきぞえになった人およそ1000万人。日本軍は東南アジアも占領したので、そこにも犠牲者がいた。全世界で総数6000万人もの人間が死んだ。おじいさんが物心ついたとき、集落には、片腕を失った人、片足を失った人がいた。学校に上がって、何人もの同級生の父親が戦死したことを知った。

9.2 近代文明の達成したもの

悲惨な戦争は、文明という言葉を使うことさえためらわせる。人類はいまだに不完全な状態にある。それでも、人類の長い歴史をふり返ると、人間はたいへんな苦勞をして今の少しましな状態に至ったのだ。基本的人権と自由・平等・民主主義は、欠陥があるけれど、近代になってやっと達成された大切な理念である。もう少し足せば、法治主義、権力の分散、思想・信条の自由、言論・集会の自由などなどは、歴史上多くの血を流して人間のたどりついた知恵だ。わたしたちは、それらの達成のおかげで、昔の人々よりも平和な生活を送ることができる。今ではこれらの言葉がありふれて聞こえるけれど、歴史を引きずる現代社会でも、どこかでそれがおろそかにされていると感じることに会おうだろう。その理念をけっして忘れてはならない。

たとえば憲法は、君主や権力者に苦しめられた人々がやっと獲得したものだ。憲法には、リンカーンの演説にある人民を守るための約束が言葉に表現されている。その歴史を知って、軽々しく憲法を扱うようなことをしてはならない。アメリカ合州国の憲法は修正されてきたが、自由と民主主義、人間の権利を後退させなかった。

科学と技術の発展

近代文明は自然科学を大きく発展させた。19世紀が終わる頃、物理学の実験は、微視的な領域に踏みこんで未

知のモノを発見した。正体不明のX線や、周期表に加わる新しい元素などだ。前章でも科学者の名など多くを省略してきたから、ここでもそうするけれど、レントゲンという名や放射能という言葉は日常会話に出てくる。例外的にキュリー夫人の名を出したけれど、夫妻の発見した元素をポロニウムと呼ぶのは、夫人の出身地ポーランドの名を残すためだ(当時、そこは独立を失っていた)。原子の発する虹が原子の構造を教えてくれ、量子力学が発見された。その前にほかの物理学者の考えてもいなかった相対性理論を発見したA. アインシュタインだけは、名を省いてはいけないだろう。相対論と量子力学は、ニュートン力学を超える世界があることを教えた。生物学でも、細胞核の中の微視的な化学物質の研究が進んで、核酸・アミノ酸や、RNA・DNA などが知られた。今日の分子生物学の発展の準備がととのえられたのだ。

物理学と化学の発展は、人間に有用な技術を発展させた。今の人間には当たり前になったけれど、近代以前とくらべれば、近代の技術文明は驚くほどのものである。わたしたちの生活は、昔の人間が夢にも思わなかったものだ。ここまでの話の中で、次々に発明されたものをちりばめてきたけれど、それでは足りない。君たちで、街や身のまわりを観察して、考えてみてくれたまえ。だが人間は、放射能の研究から始まって原子の中の原子核のことまで知って、原子爆弾や水素爆弾のようなものをつくり出してしまった。科学と技術の進展が人間にきびしい問題をつきつける時代になった。

近代後期の文化

19世紀末の思想家 F.W. ニーチェは、「神は死んだ」という言葉を吐いた。自然科学が発展し、理性の限界が認識されるようになって、かつてのようなキリスト教の文化や抽象的な形而上学は後退せざるをえない。思想と哲学は、諸学を総合するという大きな構え方から変化していく。自然科学に対抗して哲学を構成する問題意識の中で、E. フッサールが現象学哲学を提出して一つの思潮となった。実存主義の流れに、K. ヤスパースや M. ハイデガー、論理学を基礎に哲学的な考察をした人に B. ラッセルや L. ウィトゲンシュタインがいる。H. ベルグソンはまた独自の考察を深めた。哲学ではないが、精神分析学を始めた S. フロイトは、20世紀の思想に大きな影響を与えた。合理主義のアメリカにプラグマティズム哲学が生まれた。W. ジェームズや J. デューイがいる。

近代後期になると、人文科学と社会科学が諸科学の部門として発展するようになる。言語学の研究での F. ソシュールの考え方は、ほかの分野でも取り入れられた。歴史学でも進展があったようだ。経済学では、J. ケインズが現われて近代経済学を新たなものにした。彼の名は今でも聞かぬ。J. シュンペーターも近代の経済を分析的に論じた。前に名を出した M. ヴェーバーという人が、広い視野から社会学を論じて大きな業績を上げている。政治や思想について発言した人たち、とくにマルクス主義にかかわったレーニンや毛沢東そのほかの人たちも、書物を書いて社会に影響を与えた。

名前しか知らない人をあげたけれど、ぼろが出る前に話すのをやめよう。いくつかの取りくみやすい書物は、おじいさんにも読めた(笑い)。

この時代にも、多くのすぐれた作家が文学作品を書いた。現代に近いそれらの作品は、ぜひ読む価値があるだろう。19 世紀に、H. モーパッサンや H. イブセンがいた。20 世紀の文学を変革した作品は、F. カフカの『変身』、M. プルーストの『失われた時を求めて』、J. ジョイスの『ユリシーズ』などだ。文学は好みによるから、どれをあげるべきなのか問題があるけれど、君たちの読書案内として、おじいさんが読んだ作家の名をもう少しあげておこう。R. ロラン、A. ジード、A. カミュ、S. モーム、P. ヴァレリー、T. マン、H. ヘッセ、B. ブレヒト、R. リルケ、D. ロレンス、A. ハックスリー、E. ヘミングウェイ、J. スタインベック、P. バック、M. ゴーリキ、M. ショーロホフ、魯迅など…。小説や詩とは別にすぐれた書物があって、それらを読むことも大切だと思う。文学を含めた近代の作品の評価は定まっているから、名著の案内書を探してくれたまえ。定評のある文庫本の中に、読みごたえのある作品が見つかるだろう。

にがてな芸術は手早く済ませよう。芸術の都パリのあ
るフランスで多くの美術家が活動した。教科書に必ず載
っている人たちの名を孫引きしよう。印象派の C. モネ、
P.A. ルノアール、V. ゴッホ、P. ゴーガンの絵は、印刷

したものをどこかで見ているだろう。中でもP. セザンヌは、表現をきわめることを追求した。そこから、次の世代に、物の奥行きを箱のように表現するキュービズムや、画面を面的に構成する流派、さらに抽象絵画が生まれたのだ。G. ブラック、H. マティス、P. ピカソ、W. カンディンスキーなどが続く。彫刻家にA. ロダンがいる。

クラシック音楽を若者があまり聴かなくなったから、作曲家の名をあげるのは意味があるかもしれない。前章で省いた人も含めると、J. ブラームス、A. ドボルザーク、B. スメタナ、R. ワーグナー、F. リスト、G. マーラー、C.A. ドビュッシーなど。バレエ音楽「白鳥の湖」を作曲したP. チャイコフスキーの名は知っているね。

この時代の日本の文化はわたしたちをつくったものだから、特別枠で話をしよう。明治時代には、和魂洋才と言って、さかんに西洋の技術を導入した。たしかに西洋の思想を自分のものにするのに熱心でないところがあったけれども、重要な西洋の書物のほとんどが翻訳されて、しだいに吸収されていった。広い意味の思想を組み立て直すことがなされていった、と考えることができる。それに貢献した人たちのことを忘れてはいけないだろう。けれども、独自の考えをつくり出すまで進んだ人は多いとは言えない。今読んでも得るところがある福沢諭吉の『文明論の概略』をあげておこう。

のちの思想や哲学の領域では、西洋哲学に対抗して独自の哲学を築こうとした西田幾多郎などがある。ほかの

分野でも読みごたえのある書物が書かれている。自然科学の領域ではりっぱな業績をあげた人たちがいて、教科書に名が載っている。自然科学の方が取りくみやすかったのだろう。人文・社会科学では、西洋の新しい潮流を紹介するのに忙しかったのかもしれない。すぐれた仕事には文明の蓄積が必要なのだ。

文学については、夏目漱石と森鷗外を最初に見よう。二人ともヨーロッパに留学したが、日本や中国についての教養は第一級だった。今日わたしたちが使っている言文一致の日本語をつくり出すのに貢献した。漱石は読みやすい『吾輩は猫である』、鷗外はしぶい『渋江抽斎』をあげておこう。あとは、おじいさんの読んだ作品の作者を紹介してお茶を濁そう。幸田露伴、島崎藤村、樋口一葉、長塚節、永井荷風、志賀直哉、谷崎純一郎、芥川龍之介、小林多喜二、石川淳、小林秀雄、武田泰淳、北原白秋、宮沢賢治、石川啄木、萩原朔太郎、中原中也、中野重治、三好達治など。文学以外にも名著はいくつもあるよ。挑戦できるかな？

美術では、岡倉天心たちが初期の発展に尽くした。西洋の絵画が積極的に学習されて、しだいに独自の絵を描く人が現われた。おもしろいのは、日本画の伝統が保存されて、別のジャンルのようになったことだ。おじいさんに鑑識眼がないから、絵画・彫刻の作家の名は省く。建築は西洋の影響を脱したものができたのだろうか。